

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第106集

和光市

むこう やま

向山遺跡

理化学研究所関係埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県南部地域は、首都圏に拡散する学術・文化の拠点として発展してまいりました。国の機関である理化学研究所も一翼を担っておりますが、このたび、外かく環状道路が建設されることになり、理化学研究所の敷地の一部を通過することになりました。敷地内にある研究棟は隣接部分に移設されることになり、移設される部分及び、研究施設の増設部分が埋蔵文化財の包蔵地되었습니다。この地区の取扱いについて、埼玉県教育局指導部文化財保護課では理化学研究所と慎重に協議を重ねて参りましたが、このたび発掘調査を実施し記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は、理化学研究所の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成2年度に実施いたしました。その結果、縄文時代中期の土器・石器などの貴重な資料が得られました。本書は、その報告書であります。広く活用され、教育・文化・学術研究の一助となれば幸いです。

刊行に当たり、発掘調査に関する調整に尽力していただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行にいたるまで多大のご協力を頂きました理化学研究所、和光市教育委員会ならびに地元関係者の方々に対し、深く感謝いたします。

平成3年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

例　言

- 1 本書は埼玉県和光市南2丁目1535番地他に所在する向山遺跡（平成3年6月7日付け委保第5号の1815号）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は理化学研究所施設建設に先立つ事前調査であり、埼玉県教育指導部文化財保護課の調整を経て、理化学研究所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 本書にかかる発掘調査は、平成3年1月から3月まで実施した。発掘調査対象面積は3500m²である。報告書作成のための整理作業は、平成3年度に受託し、平成3年4月から平成3年6月まで実施した。発掘調査・整理作業の組織は第1章に示した。
- 4 発掘調査時の写真は、黒坂精二が主として撮影し、遺物写真は、橋本　勉が撮影した。
- 5 出土品の整理及び図の作成は橋本が担当した。
- 6 本書の執筆は、第1章1を文化財保護課、そのほかは橋本が担当した。
- 7 本書の挿図における指示は次のとおりである。
 - ・X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を示す。
 - ・挿図の縮尺は、ピット1/40、拓影図1/3、石器1/2・1/3を原則とした。
- 8 本書の編集は、資料部資料整理第2課及び橋本があたった。
- 9 本書にかかる資料は、平成3年度以降埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 10 本書の作成にあたり、下記の方々より御協力を賜った。（敬称略） 鈴木一郎（和光市教育委員会）

発掘調査参加者

石原ひろみ　諫訪一郎　諫訪嘉子　関根俊子　辻由起江　星野律子　松田洋子　松田光子　宮永美都　森信二郎　波部早苗

整理作業参加者

金子きよ子　小林きよ子　坂上富志子　長友麗子　福田貞子　福川利子　本松章子　森　ヒロ

目 次

序

例言

目次

I . 調査の概要.....	1
1 . 発掘調査に至る経過	1
2 . 発掘調査と報告書刊行事業の組織	2
3 . 調査の経過と方法	2
II . 遺跡の立地と環境	3
III . 遺跡の概観	6
IV . 遺構と遺物	7
1 . ピット	7
2 . グリット出土遺物	9
V . 結語	18
1 . 向山遺跡出土土器の復元	18
2 . 胸部満巻紋系の土器について	25

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	5
第2図 遺跡周辺の地形図	6
第3図 基本土層	7
第4図 ピット	7
第5図 向山遺跡全圖	8・9
第6図 遺物分布図	10・11
第7図 グリット出土土器拓影図（1）	12・13
第8図 グリット出土土器拓影図（2）	14・15
第9図 グリット出土土器拓影図（3）・石器	16・17
第10図 将監塚J-57号住居跡を中心とした加曾利E III式基本系列	19
第11図 埼玉県における胴部渦巻紋系土器（1）	20
第12図 埼玉県における胴部渦巻紋系土器（2）	21
第13図 脇部渦巻紋系土器を中心とした造構出土土器（1）	22
第14図 脇部渦巻紋系土器を中心とした造構出土土器（2）	23
第15図 脇部渦巻紋系土器を中心とした造構出土土器（3）	24・25
第16図 加曾利E III式理解の概念	28

表目次

表 1 周辺の遺跡

表 2 ピット一覧

写真図版目次

図版 1 向山遺跡全景（1）	グリット出土土器（3）
向山遺跡全景（2）	グリット出土土器（4）
図版 2 ピット群	グリット出土土器（5）
ピット（4・5・6）	グリット出土土器（6）
図版 3 ピット（12）	グリット出土土器（7）
グリット出土土器（1）	図版 7 グリット出土石器（1）
図版 4 グリット出土土器（2）	図版 8 グリット出土石器（2）

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

和光市は埼玉県の南部で東京都練馬区に接する位置にあり、交通の要衝でもある。市内には都内の交通緩和に対処するため外郭環状線の建設工事が行われている。理化学研究所は国道254号線に隣接し、新規に建設される外郭環状線に挟まれた所に位置し、この外郭環状線の建設とともに理化学研究所研究棟の一部が移転することになった。

平成2年7月、理化学研究所理事長から、平成2年7月5日付け2外環第13号をもって「理化学研究所施設建設工事事業地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会がされた。

県教育局指導部文化財保護課では、遺跡地図と照合したのち、平成2年7月16日現地踏査を行い、今後の対応について理化学研究所と協議した。その結果はおむね次のような合意を得た。地形から推測して埋蔵文化財の所在する可能性があるため試掘の必要があり、現地は林に覆われていることから理化学研究所において伐採を行った後、試掘を実施する。

平成2年9月27・28日、10月1日～3日の5日間遺跡範囲確認調査を実施した。確認調査の結果、協議区域（造成対象区域）の一部に埋蔵文化財の分布が確認されたため、文化財保護課は平成2年10月9日付け教文第472号をもって、理化学研究所理事長あて、つぎのような回答を行った。

1. 建設予定地には縄文時代の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

2. これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いは、現状保存することが望ましい。

3. 事業計画上止むを得ず現状を変更する場合は文化財保護法第57条3の規定に従って、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。

4. 調査の実施にあたっては、文化財保護課と協議すること。

その後、取り扱いについて文化財保護課と理化学研究所と協議を重ねたが、計画変更は不可能となつたため、止むを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査の実施については、理化学研究所、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者により、調査方法、調査期間、調査経費を中心に協議を行った。その結果を文化財保護課から平成2年10月25日付け教文第896号により理化学研究所理事長及び財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あてに通知した。

発掘調査は平成3年1月から3ヶ月間、実施することとなった。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは文化財保護法第57条1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成2年12月7日付け財理文671号で文化庁長官あて提出され、文化庁からは、平成3年6月7日付け委保第5の1815号で受理通知があった。

（文化財保護課）

2、発掘調査と報告書刊行事業の組織

a. 発掘調査（平成2年度）

理 事 長 荒井 修二
副 理 事 長 早川 智明
常 務 理 事 兼
管 理 部 長 古市 芳之
庶務經理
庶 務 課 長 高田 弘義
主 員 松木 晋
主 事 長 滝美智子
經 理 課 長 関野 宗一
主 任 江田 和美
主 事 本庄 朗人
主 事 斎藤 勝秀
發掘

理 事 兼

調査研究部長 吉川 國男
調査研究副部長 塩野 博
調査研究第3課長 宮崎 朝男
主任調査員 橋本 勉
調査員 黒坂 稔二

b. 報告書作成事業（平成3年度）

理 事 長 荒井 修二
副 理 事 長 早川 智明
常 務 理 事 兼
管 理 部 長 倉持 悅夫
庶務經理
庶 務 課 長 高田 弘義
主 員 松木 晋
主 事 長 滝美智子
經 理 課 長 関野 宗一
主 任 江田 和美
主 事 福田 昭美
主 事 腰塚 雄二
上 事 菊池 久
整理

資 料 部 長 中島 利治
資料部副部長 兼
資料整理第1課長 増田 逸朗
主任調査員 橋本 勉

3、発掘調査の方法と経過

向山遺跡の調査は、理化学研究所の増設に伴って平成3年1月から平成3年3月までの3カ月間にわたって実施された。外かく環状線の路線内にある建築物の移動と施設の増設によって建設される敷地の一部分3、500m²を調査対象とした。調査区は、ほぼ方形で調査以前は雑木林であった。

平成2年12月中旬に理化学研究所担当者と打ち合わせをおこない、平成3年1月から本調査を開始した。表土除去作業をブルドーザー、バックホー等の重機でおこない1月中旬には終了した。1月下旬より調査補助員による遺構確認作業をおこない2月中旬にはほぼ全容を攝んだ。遺跡全面に擾乱が入り遺構、遺物の遺存状態が極めて悪く、10数基のピットと同じように分布する遺物集中が認められたに過ぎなかった。遺構の精査、土器の取り上げ、図面の作成、写真撮影を順次おこない、航空写真撮影をおこなって3月末に終了した。最後に、機材の撤収をおこない調査を終了した。

調査グリッドの設定には、国家標準直角座標系IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づき、原点を遺跡の北西隅X=-25.020、Y=-19.940におき、南及び東に数値の増す10m方眼を基準としておこなった。グリッドの呼称は、10m間隔で西から東へAからGのアルファベットで、北から南へ1から9の数字で表記した。主な基準杭の座標値は、D-3杭でX=-19.930、Y=-25.040、F-6杭でX=-19.900、Y=-25.060である。

II. 遺跡の立地と環境

向山遺跡は、埼玉県和光市南二丁目に所在する縄文時代中期の遺跡である。和光市は、東側は東京都板橋区に、南側は東京都練馬区に接する埼玉県の最南端部であり、東武東上線和光市駅から南に約1.3kmほど離れた武藏野台地の東末端に位置している。

武藏野台地は、多摩川の扇状地として発達し、奥多摩を頂点として緩く傾斜しながら南東方向に大きく開いている。向山遺跡が乗る武藏野台地南端部は、野火止台地と呼ばれ、大河川である荒川と荒川低地によって大宮台地と柳瀬川によって川越台地と区切られている。

遺跡周辺に目を転ずる。西側には東京都と境界を接する白子川が、北側には谷中川が、東側には

朝霞市と隔てる越戸川が新岸川に流れている。これら的小河川に向かって多くの開析谷が入り組んで形成されており、台地は狭小で複雑な地形となっている。向山遺跡は、白子川と谷中川上流に挟まれた細長い台地のほぼ中央部に位置して標高は約40m、遺跡の集中する白子川や越戸川流域とは若干ではあるが立地を異にしている。

向山遺跡の周辺遺跡は、越戸川と谷中川の合流する付近(A)、谷中川の北側(B)、白子川流域(C)の3グループに大別され、白子川流域はさらに下流域のグループ(C1)と中流域のグループ(C2)に分断されるようである。先王器時代の遺跡は、A・C1・C2グループに分布している。柿の木坂遺跡(5)、成増との山遺跡(23)、練馬区N075遺跡(26)、練馬区N012遺跡(30)、練馬区N018遺跡(32)、練馬区N017遺跡(35)、練馬区N013遺跡(37)などが挙げられる。特に、外かく環状線建設関係で発掘された柿の木坂遺跡では礫群を中心とした文化層が数枚検出されている。

縄文時代に入るとBグループにまで分布は拡大する。特に、縄文時代早期と中期に遺跡が増大するようである。本遺跡と関係のある縄文時代中期の遺跡には、Aグループ—柿の木坂遺跡(5)、妙蓮寺遺跡(6)、上谷津遺跡(8)、向原遺跡(9)、Bグループ—牛王山遺跡(15)、C1グループ—城山南遺跡(17)、城山遺跡(18)、吹上貝塚(20)、皆原神社台地遺跡(22)、成増百向遺跡(24)、成増一丁目遺跡(25)、練馬区N074遺跡(27)、C1グループ—練馬区N070遺跡(28)、同N011遺跡(31)、稲荷山遺跡(31)、同N018遺跡(32)、橋戸A地点遺跡(40)、丸山遺跡(41)、橋戸B地点遺跡(42)などが挙げられる。特に吹上貝塚では加曾利EⅠ式、EⅡ式の住居跡が検出されている。

弥生時代になると各グループに遺跡は分布するが、AグループとBグループで増大化現象が起こり、古墳時代以降になるとさらに増幅されC2グループでは分布が極減し、遺跡の低地化現象がみられる。

遺跡名

1	向山遺跡	縄紋(中)		和光市
2	丸山台遺跡	先土器、弥生、古墳		
3	小井戸遺跡	縄紋(後)、古墳		
4	柿ノ木坂遺跡	縄紋(中)、古墳		
5	柿ノ木坂遺跡	先土器、縄紋(早・中・後)		
6	妙蓮寺遺跡	縄紋(中)		
7	松山遺跡	古墳		
8	上谷津遺跡	縄紋(中)		
9	向原遺跡	縄紋(中)、古墳		
10	仏ノ木遺跡	平安		
11	四ノ木遺跡	弥生、古墳		
12	峰遺跡	古墳		
13	花ノ木遺跡	弥生、古墳、奈良・平安		
14	上之郷遺跡	弥生、古墳		
15	午王山遺跡	縄紋(早・中)、弥生、古墳、奈良・平安	鈴木他 1981	
16	白子宿上遺跡	縄紋(早・後)、古墳	谷井他 1971	
17	城山南遺跡	縄紋(早・中)		
18	城山遺跡	縄紋(前・中)	柳田 1968	
19	市場映遺跡	縄紋(早・後)、弥生、古墳、奈良・平安		
20	吹上貝塚	縄紋(前～晩)		
21	午房遺跡	縄紋(前・中)	谷井 1981	
22	菅原神社台地遺跡	縄紋(前・中)、弥生		板橋区
23	成増との山遺跡	縄紋(後)、弥生	大沢 1978	
24	成増自向遺跡	縄紋(早・中)、弥生		
25	成増一丁目遺跡	縄紋(中)、弥生	永峰・鈴木 1981	練馬区
26	練馬区N○75遺跡	先七器、縄紋(後)		
27	練馬区N○74遺跡	縄紋(中)		
28	練馬区N○70遺跡	縄紋(中)		
29	練馬区N○11遺跡	縄紋(早)		
30	練馬区N○12遺跡	先土器		
31	種荷山遺跡	先土器、縄紋(早～中)	野崎他 1989	
32	練馬区N○18遺跡	縄紋(中)		
33	大泉中里遺跡	縄紋(早)	窪山・本橋他 1989	
34	練馬区N○19遺跡	縄紋(早～後)		
35	練馬区N○17遺跡	先土器		
36	練馬区N○16遺跡	縄紋(早)		
37	練馬区N○13遺跡	先土器、縄紋(早)		
38	練馬区N○14遺跡	弥生		
39	練馬区N○137遺跡	中世		
40	橋戸A地点遺跡	縄紋(早・中・後)、弥生		
41	丸山遺跡	縄紋(早～中)、弥生		
42	橋戸B地点遺跡	縄紋(中・後)		

参考文献

練馬区教育委員会 1982 練馬区の遺跡

練馬区遺跡調査会 1989 大泉中里遺跡

和光市 1981 和光市史 資料編1

和光市新倉午王山遺跡調査会 1981 新倉午王山遺跡

和光市教育委員会 1971 白子宿上遺跡

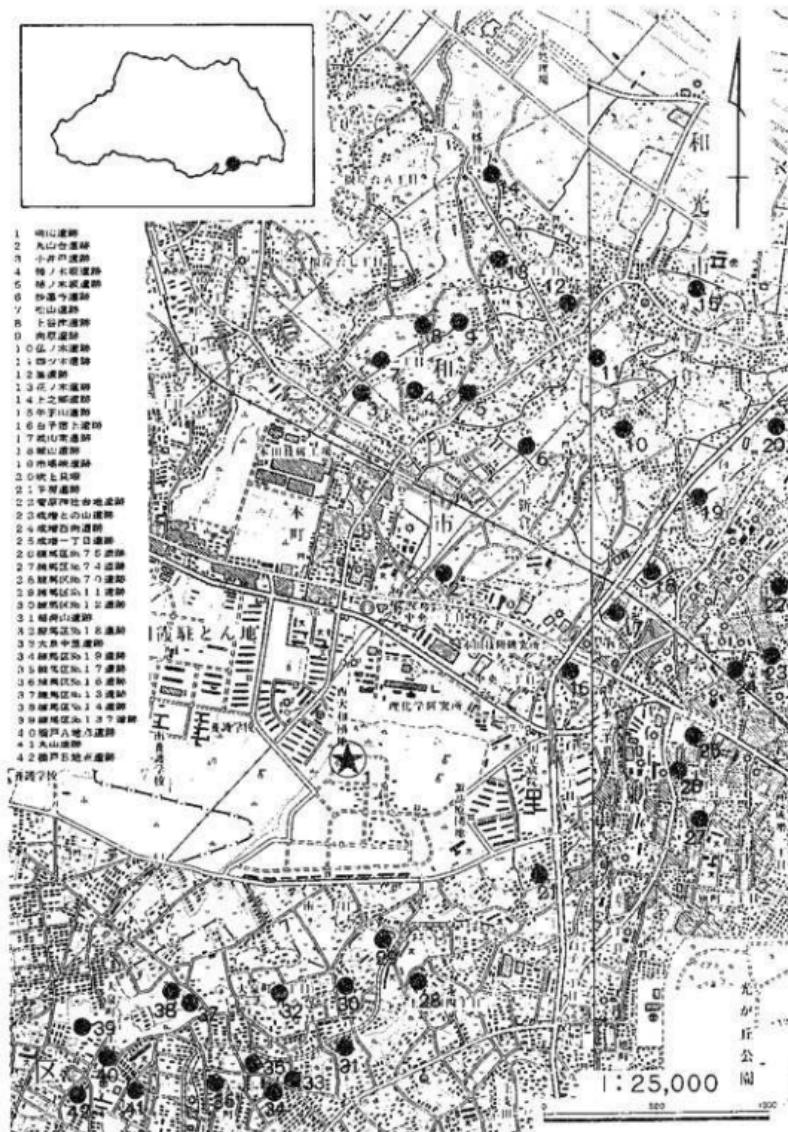
大和町教育委員会 1958 城山遺跡

板橋区教育委員会 1978 板橋区の遺跡

成増一丁目遺跡調査会 1981 成増一丁目遺跡発掘調査報告書

成増との山遺跡予備調査団 1987 成増との山遺跡予備調査報告書

練馬区遺跡調査会 1989 種荷山遺跡

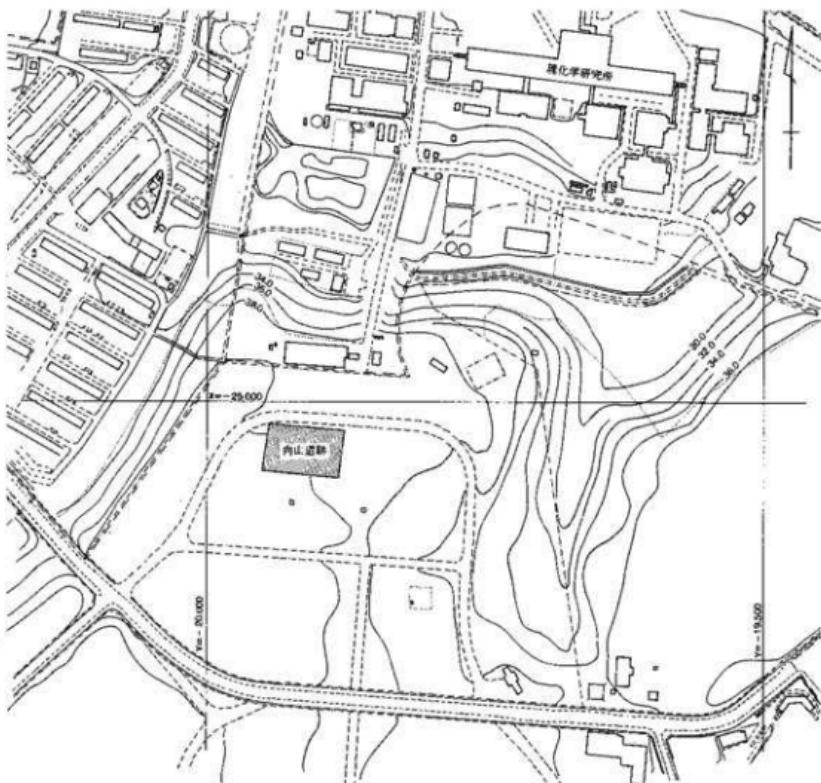


第1図 周辺の遺跡

III. 遺跡の外観

向山遺跡は、白子川という小さな川からやや奥まった台地の上にあります。台地は、両側に谷があり込んだ舌のような形をしています。本遺跡のような縄文時代の集落は、こんな台地にあることが多いのです。

遺跡の表土（近代や現代の人々がかきまわしてしまって昔の状態を残さない土）を取り除くと土器や石器が出てきました。土器は、縄文時代中期の後半頃のもので加曾利E III式と呼ばれています。小さな破片ばかりでしたが全部で約930個ほど出土しました。石器は、土を掘る道具である打製石斧や矢尻が見つかっています。遺構は、ピットと呼ばれる小さな穴が13基ほど見つかっただけでした。家の跡などは別の場所にあったものと思われます。



第2図 遺跡周辺の地形(1:5000)

IV. 遺構と遺物

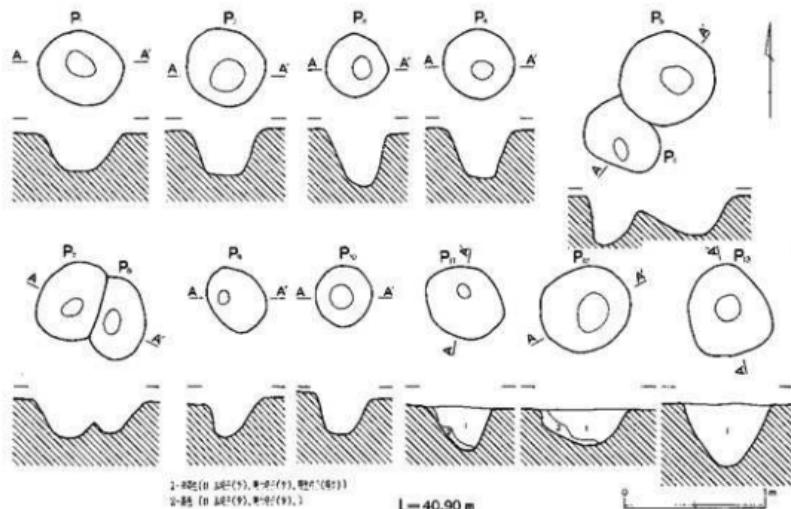
向山遺跡から検出された遺構は、僅かにピットが13基だけであった。これは、第二次大戦前・中の師範学校及び戦後のアメリカ軍の施設による搅乱が全面に及んでいたためである。この搅乱は、予想以上に激しく遺跡の中央から西側にかけてはローム層にまで達していた。従って、遺構・遺物ともに分布は薄く東側に僅かに検出されたにすぎない。同時に、遺物分布から見る限りでは集落跡の東限であった可能性も否定できない。

基本土層は、表土層下にロームが堆積し概ね武藏野台地の層序に準じる(第3図)。但し、VII層からIX層までは分離していない。先土器時代の調査については、調査区の主要部分にテストピット設定しV層まで下げたが遺物は検出されなかった。

第3図 基本土層

1. ピット

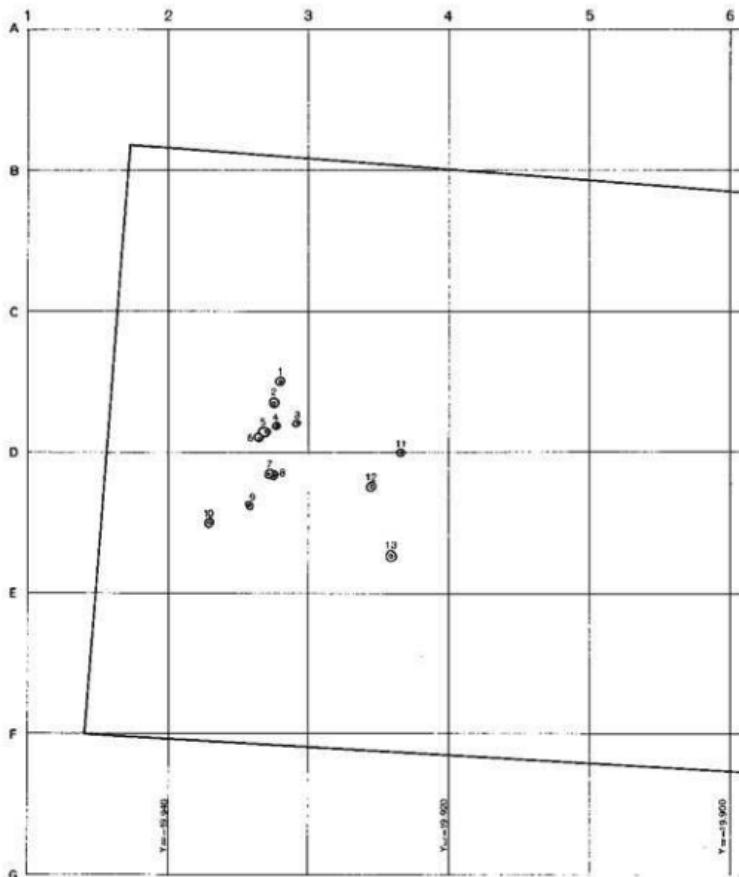
本遺跡から発見された遺構は、ピットが13基である。C-2、C-3、



第4図 ピット

D-2、D-3グリッドから検出された。これらのグリッドからは、遺物の集中も認められ、時期は加曾利E III式単相であるためピットも同時期と思われる。

ピット番号	長径	短径	深さ	ピット番号	長径	短径	深さ
1	0.60m	0.50m	0.27m	8	0.58m	0.33m	0.24m
2	0.56m	0.52m	0.33m	9	0.47m	0.37m	0.28m
3	0.45m	0.45m	0.41m	10	0.43m	0.41m	0.30m



第5図 向山遺跡全測図

4	0.51m	0.48m	0.37m	11	0.60m	0.50m	0.33m
5	0.65m	0.65m	0.35m	12	0.64m	0.62m	0.25m
6	0.58m	0.38m	0.27m	13	0.65m	0.60m	0.45m
7	0.60m	0.45m	0.28m				

2. 土器



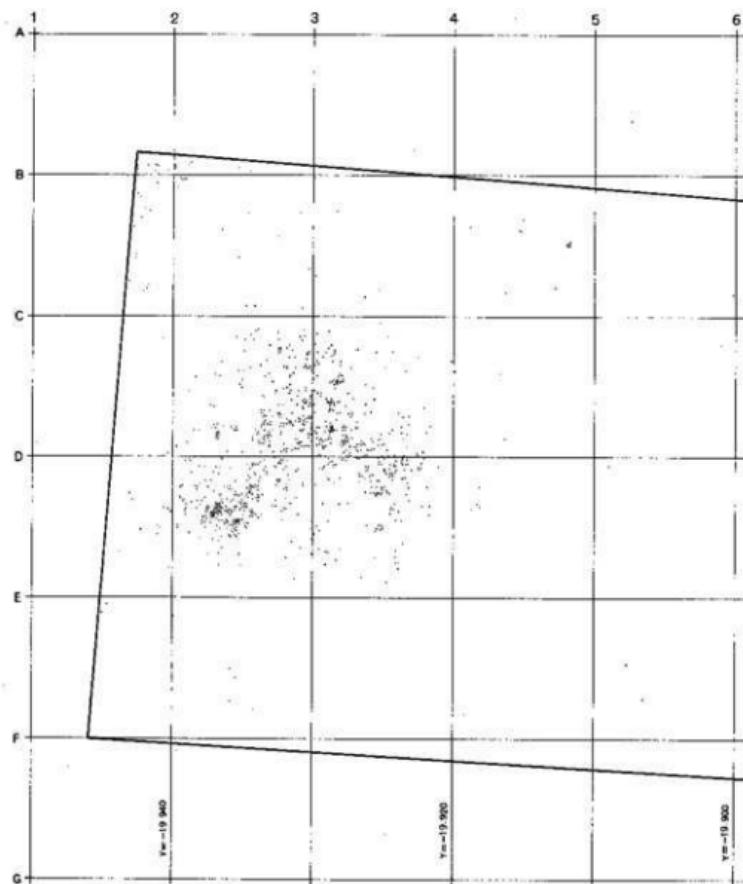
本遺跡から出土した土器は、総て縄紋時代中期後半に属するものである。内容は、加曾利E I式が3片の他は総て加曾利E III式であった。土器の分布は、C-1、C-3、D-2、D-3グッリドに集中しており、A-1、A-2、B-1グッリドの調査区北西隅に僅かな集中がある他はごく少量である。

第1群土器（1、59、60） 加曾利E I式である。1、59、60ともに頸部無紋部が看取される。1は、口縁部を欠失するが内側が強く、口縁部紋様帶にR L横回転の繩紋が配される。器壁は比較的薄い。59も口縁部の内側が強く、カマボコ状の隆起線で口縁部紋様帶と胸部紋様帶が区画される。60は口縁部が立ち気味となり新しいものであろう。カマボコ状の隆起線で紋様帶が区画され、R L縱回転の繩紋が口縫部に施紋される。

第2群土器（第1群以外の土器） 加曾利E III式土器である。記述に際しては、口縁部破片を4類に、胸部破片を3類に分類した。1類・2類と5類が3類と6類が4類と7類が大略対応する。

第1類（2～4、61） 口縁部紋様帶と胸部紋様帶を持つ加曾利E系列の土器を本類とする。「縄文中期土器群の再編」

埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要—1982—（以下埼玉県埋文紀要編年と略す）のⅢ期1類に属する。2は浅い沈線区画で器壁が厚く、口唇が内側に突出する。繩紋はRL横回転である。3は口縁部紋様帯下に直接胴部紋様帯が付く。内側する口縁部を持ち、断面が三角形状の隆起線区画で梢円状の口縁部紋様を持つものと思われる。区画内に繩紋の充填は認められず口辺部にLR横回転の繩紋が施紋される。第2群bの影響であろう。僅かに胴部の磨消繩紋が看取される。4は内壁の少ない平縁深鉢で、隆起線区画で「の」字状紋と梢円紋が連結して描かれる。区画内への繩紋施紋はない。61も口縁部があまり内側しない深鉢と思われ、隆起線区画で口縁部に円形の紋様が描かれる。胴部にはLR縦回転の繩紋が配され、縦方向に充填されるものと思われる。



第6図 遺物分布図

第2類(5~25) 口縁部紋様帯が狭小な無紋帯(a)となり波状沈線区画充填繩紋をもつもの、及び口縁部紋様帯が壊失するもの(b)で、波状沈線区画充填繩紋を持つもの。埼玉県埋文編年第Ⅲ期2類に相当する。

a (5~15) 口縁部紋様帯に狭小な無紋帯をもつもの。14を除いて内縛する。無紋部と繩紋部を区画する沈線は、浅く幅広い。5は区画沈線下にRL横回転の繩紋を1条施紋し、以下に同一原体による継回転の繩紋を施紋する。波状沈線区画充填繩紋が僅かに窺える。6は口縁部無紋帯を区画する浅く幅広い沈線下にRL横回転の繩紋が1条施紋されている。7にも口縁部無紋帯を区画する浅く幅広い沈線紋が見られる。8はII縁部無紋帯を区画する沈線下にLR継回転の繩紋が施紋さ

れる。口唇部が内側に肥厚せず、器形も他のものとは若干異なっているため、或いは繩紋だけが施紋される埼玉県埋文編年第Ⅲ期8類かも知れない。9も口縁無紋を区画する浅く幅広い沈線が窺える。14は波状口縁で或いは第1類かもしれない。10~13、15は、無紋部のみの破片で第4類との岐別が難しいが、一応本類とした。

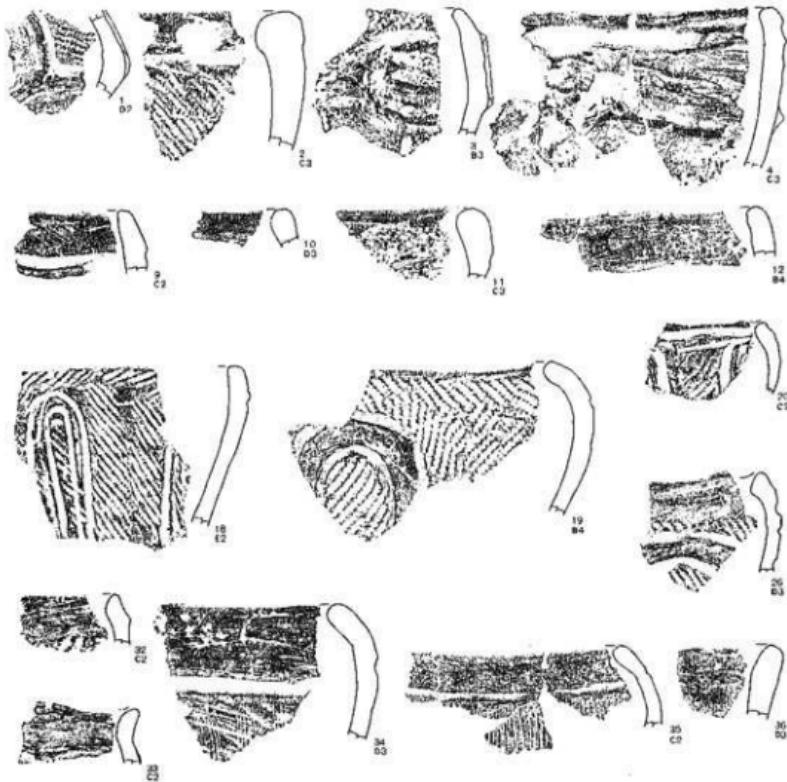
b (16~25) 口縁部紋様帯を欠くもの。16~19、21~23は口唇下に横回転の繩紋が施紋される。16は波状沈線区画紋が僅かに窺える。繩紋は荒い擦りのLRである。17は口唇部がフラットで特異である。18は口縁部の内縛が僅かで、他の2類bとは若干異なっている。沈線区画波状紋のモチーフを浅く幅広い2本沈線で描き、間隔の僅かに空いた継回転LRの繩紋を充填している。2本沈線間の研磨は見られない。19は口縁部がかなり強く内縛する。浅く幅広い2本沈線で波状沈線紋を描き、RLの繩紋を充填している。2本沈線間には研磨が施される。20は口縁直下に1条の沈線を配し、波状沈線区画紋の先端が前述沈線に接している。従って口唇下の横回転の繩紋がない。RLの繩紋が充填されている。デッサン時の細い沈線が残されている。21はLR



の繩紋が施紋され、波状沈線区画紋もかいま見られる。22はLRの繩紋が施紋され、区画沈線を消している。24にも波状区画紋の2本の沈線が窺える。

第3類(26~32) 口縁部繩様帯に狭小な無紋部を持つもので胸部渦巻紋系のもの。口縁部は内唇する。埼玉県埋文編年第3期4類に相当する。26は波状口縁で口縁内側が「く」字状に突出する。太めの隆起線にナゾリが加わり紋様が描かれる。LRの繩紋が充填される。27は波状口縁で、偏平な隆起線で口縁部無紋部を区画する。LRの繩紋が充填される。28~32は微降起線で描かれる。30は波状口縁で2本組の微隆起線で描かれる。

第4類(34~37) 口縁部に横走沈線による無紋部を持ち、以下に条線紋を持つもの、及び口縁部から条線紋を配するもの。34、35は口縁部の内唇の度合いが強く、無紋部を区画する沈線下に条

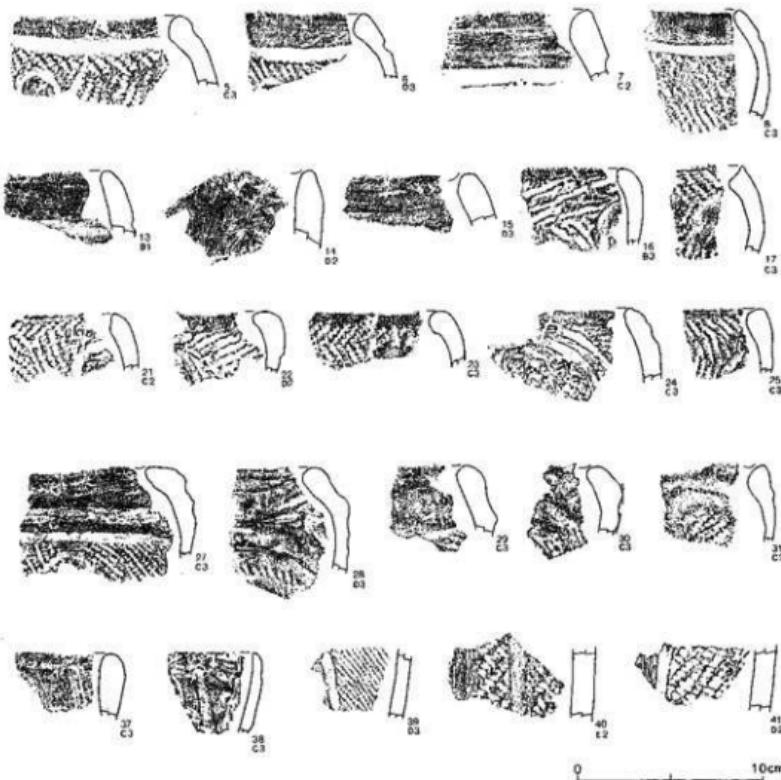


第7図 グリッド出土土器(1)

縦紋が配される。条線は細かいもので縱方向に施紋される。36、37は外反する口縁部を持ち口縁直下から条線紋が施紋される。

第5類 (39~58) 磨消繩紋を持つ胴部破片を一括する。40、41、46、50、51、53、57は大粒のR L 縦回転の繩紋が充填される。44は繩紋部に「の」字状の沈線紋が看取される。47は楕円紋、48、49は波状紋が2本沈線によって描かれる。48は条線紋が充填されるが一応本類としておいた。47、56は細かい0段3条のR L が充填される。58は細かい0段3条のR L と中粒のL R の2種類の原体が使用されている。52はL R の繩紋にRの繩紋が1本付加される付加繩紋である。縦回転で充填されているが、1条だけ横回転が入る。

第6類 (62~77) 隆起線・微隆起線を持つ胴部破片を一括する。62~69は1本の微隆起線・隆

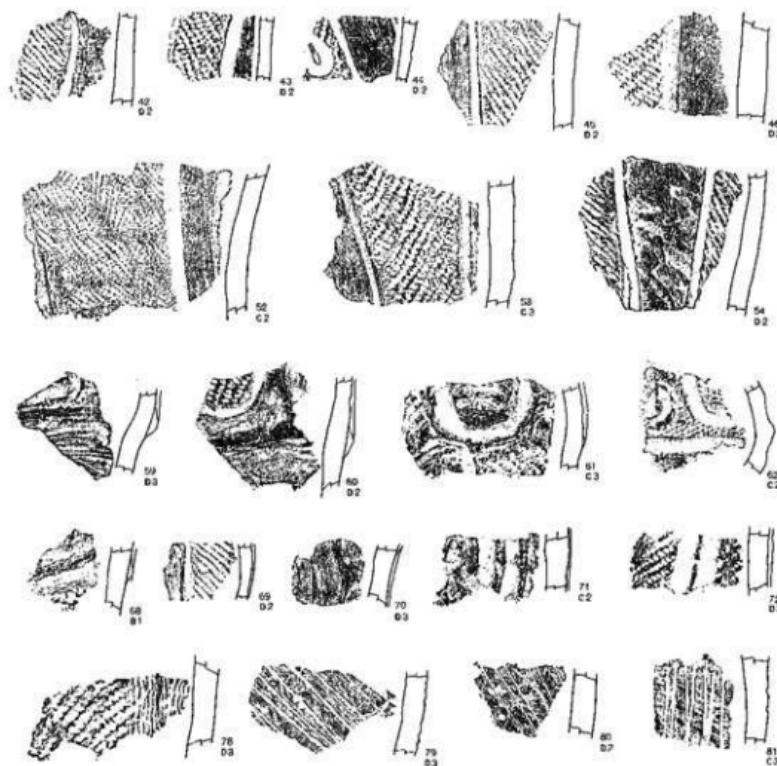


起線紋によって紋様を描くのに対して、70~77は2本一组で紋様が描かれる。71、72は隆起線に沿ったナゾリが明瞭である。

第7類 (78~100) 条線紋を持つ土器片を一括する。条線の間隔が荒いもの (79~82) 細密なもの (63~100) の別がある。89、90、92、93、95、96は縦位に波状を描く。83、84は口縁無紋部と区画する幅が広い横走沈線紋が見られる。

第8類 (33、38) 小形無紋の土器である。33は波状口縁で口縁下で「く」字状に外反する。38は器壁が薄く、口唇部が尖り気味である。

第9類 (101~108) 底部を一括する。101には条線紋が見られる。



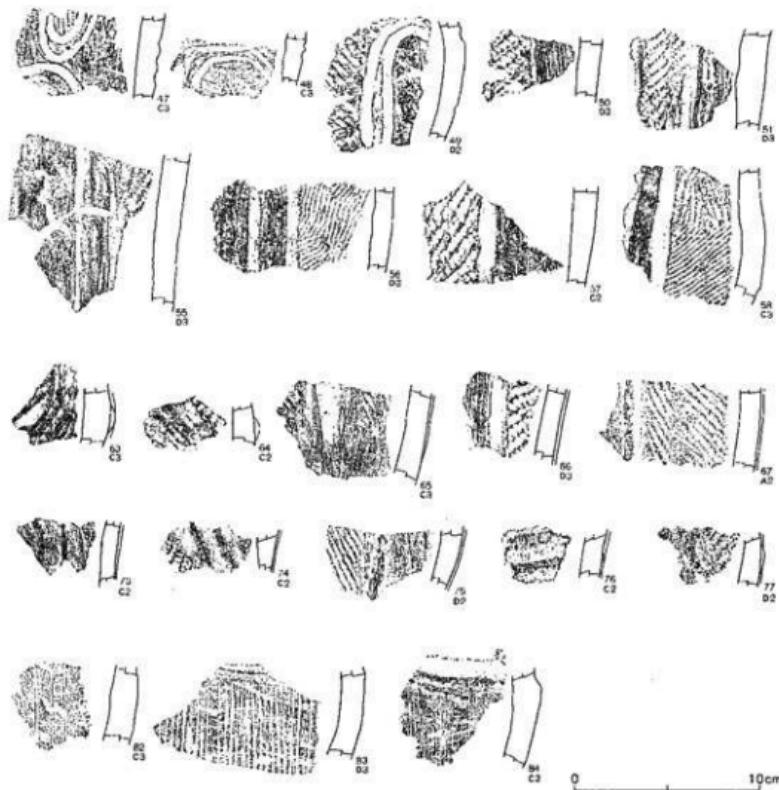
第8図 グリッド出土土器(2)

3. 石器

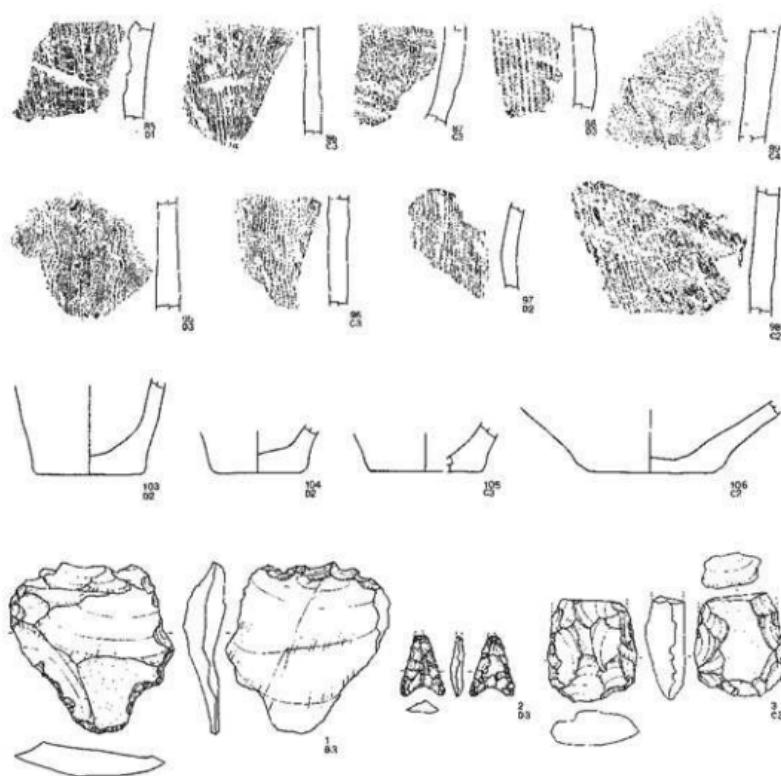
スクレイパー（1） 裏面に主要剥離痕を残す剥片を素材とする。正面に自然面を残す。舌状に突出した図下方に裏面からの小剥離によってスクレイパー・エッジを形成している。長さ—6.1cm、幅—5.9cm、厚さ—1.6cm、重量—35.9gを計る。珪岩。

石鎌（2） 黒曜石製。先端部が欠損する。基部に快りが入り2等辺三角形状を呈する。裏面に主要剥離痕を残す。長さ—2.1cm、幅—1.6cm、厚さ—0.5cm、重量—1.0g。

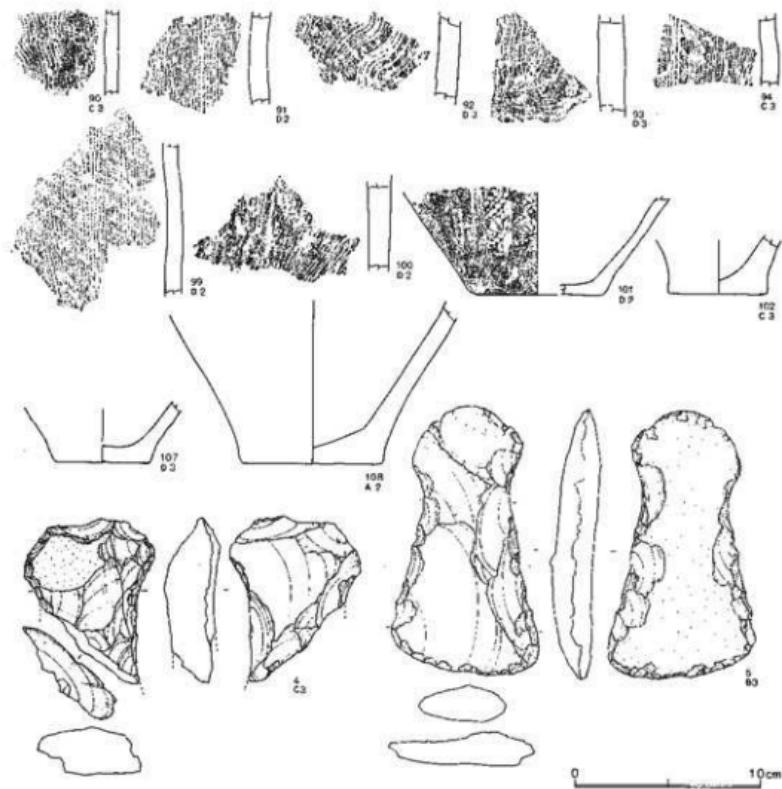
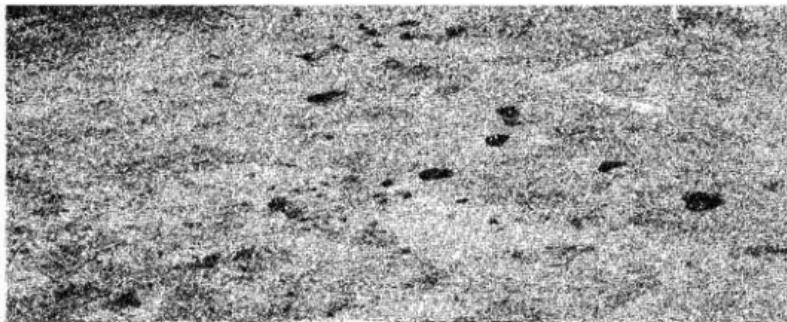
打製石斧（3～5） 3はホルンフェルス製。上半部を欠損する短筒形で表裏両面に自然面を残す。



す。円刃である。長さ—5.5cm、幅—4.7cm、厚さ—2.2cm、重量—74.3g。4はホルンフェルス製。下半部を欠損する分銅形打製石斧。正面部に自然面を残す。長さ—9.4cm、幅—7.1cm、厚さ—3.6cm、重量—132.6g。5は砂岩製。完存品。括れ部が上方にある分銅形打製石斧である。表面に自然面を残す。片刃である。若丙部も入念に作られている。長さ—14.4cm、幅—8.0cm、厚さ—2.5cm、重量—245.9g。



第9図 グリッド出土土器(3)・石器



V. 結語

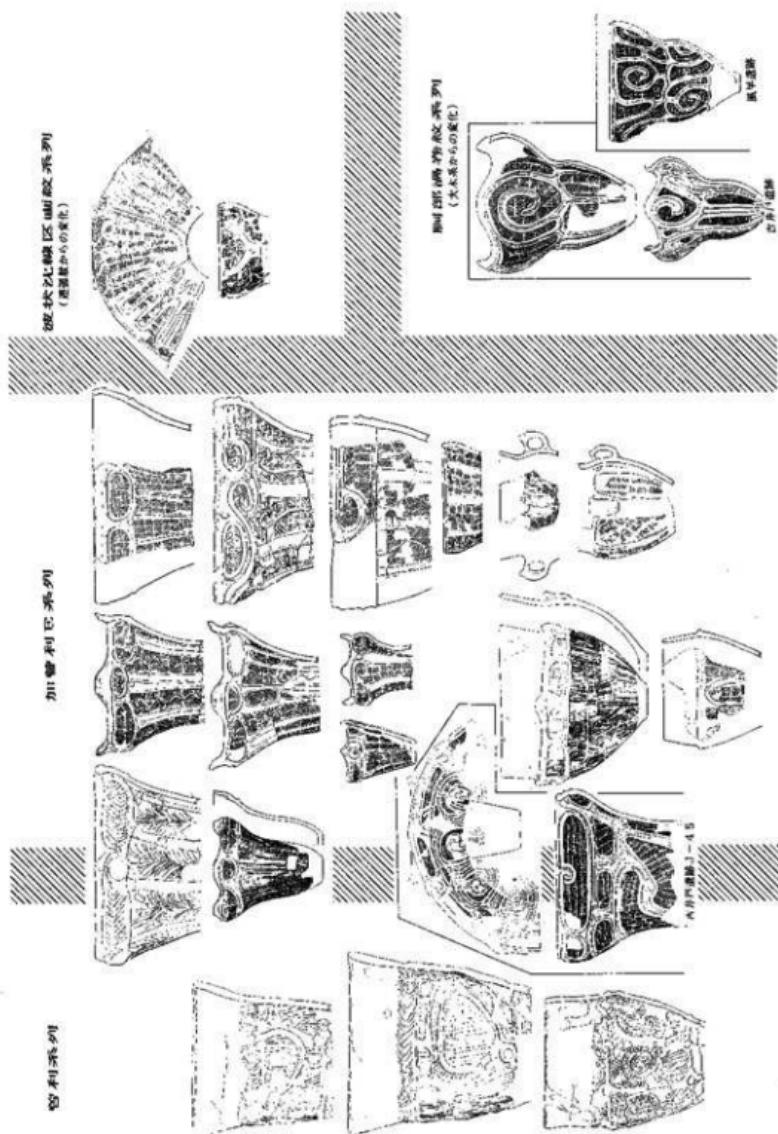
向山遺跡から出土した遺構と遺物は、縄文時代中期加曾利E III式に属するものであった。しかししながら、遺物はいずれも細片であって全体をかいま見ることは難しい。ここでは、簡単に向山遺跡で分類した土器がどのような器形と紋様を持っていたかを復元しておきたい。同時に、向山遺跡の属する加曾利E III式の中から胴部溝巻紋系土器と呼ばれている一系列を注出して若干の検討を加えたい。

1. 向山遺跡出土土器の復元

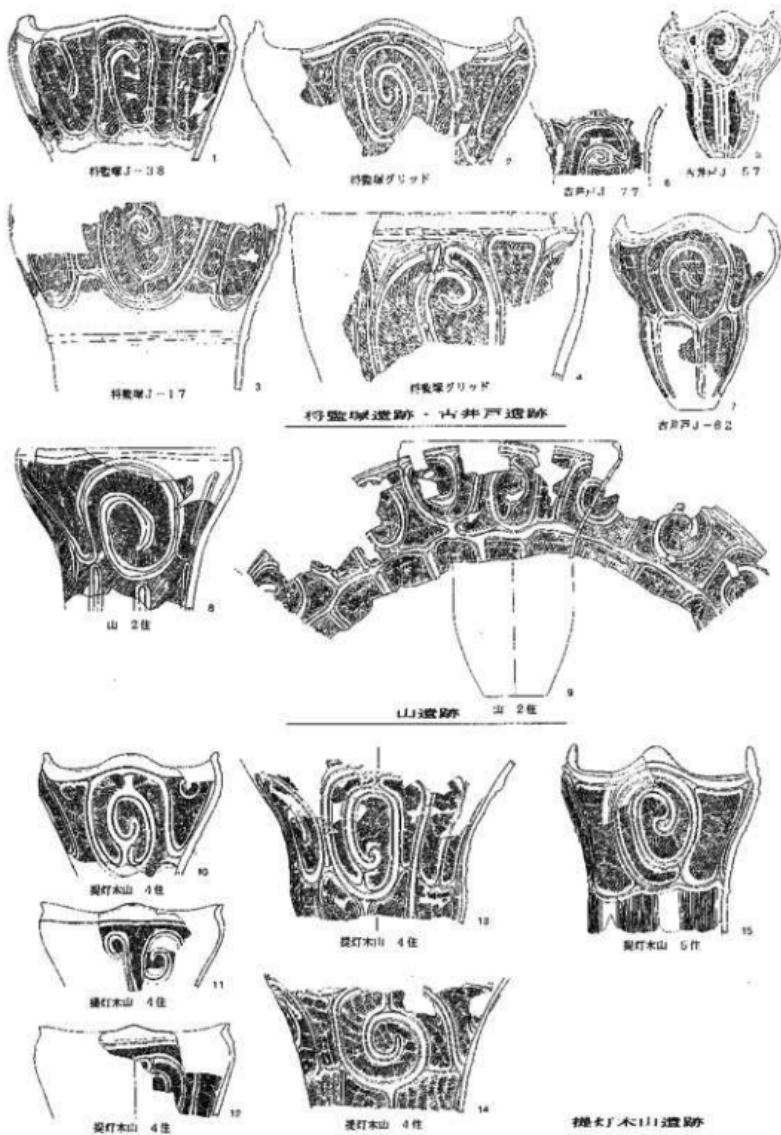
向山遺跡出土土器の口縁部を中心として、本遺跡では第2群土器を4類に分類した。この内、3類と4類は精粗の違いで同一の系列に属するものと思われるため、基本的系列は3つである。この分類は、埼玉県埋文編年に準じたつもりであり、筆者の加曾利E III式土器理解の基幹としておきたい。以下、良好な資料が出土している将監塚J-57号住居跡（第10図）を参考にしながら概観して行きたい。

向山遺跡第1類—加曾利E系列と仮称しておきたい。加曾利E式伝統の系列に属するもので、加曾利E II式から変化してくるキャリバー形の深鉢を中心とする。口縁部紋様帶（以下「1紋様帶」と呼んでおく）と胴部紋様帶（以下「2紋様帶」と呼ぶ）を引き続き配置することを特徴とする。この紋様帶配列を持つものは、曾利系列の一部分を除いては見あたらない。1紋様帶は、沈線や隆起帯によって横円紋・溝巻紋・「の」字状紋等が描かれ、縄紋が充填される。2紋様帶は、充填磨消繩紋が配され縱位蛇行紋・「の」字状紋等が付加される。充填磨消繩紋が横円紋に変化しているものも見られる。この他に、両耳塞や外反する口縁部を持ち胴部紋様だけが施紋される半精製土器等がある。なお、前述の1紋様帶と2紋様帶を持つ深鉢形土器の中には、2紋様帶に溝巻紋を持つものが存在する。本遺跡では、不明確であるが、大木式の影響を受けて加曾利E式伝統の系列中に存在するものである（石坂・藤巻・桜岡 1988）。将監塚J-57号住居跡からの出土がないためJ-45号住居跡を図示しておいた。但し、次項で取り扱う胴部溝巻紋系土器とは系列を異にするもので、紋様が似通っているからといって同一視してはいけない。

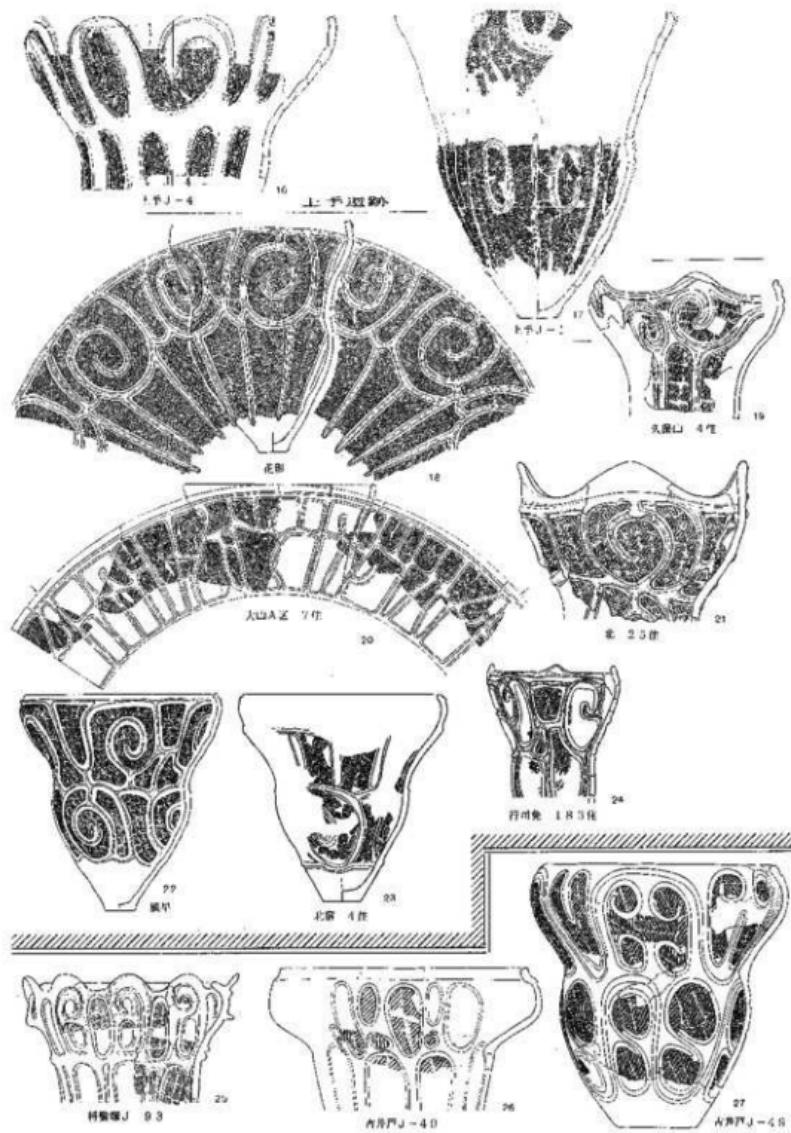
向山遺跡第2類—波状沈線区画紋系列の土器。口縁部は内彎し、胴部で緩く括れる深鉢形土器で、波状沈線区画紋を2紋様帶に描き1紋様帶を喪失するものを基準とする。明瞭でないが2紋様帶は、上位と下位に分かれるようで上位を「2a紋様帶」、下位を「2b紋様帶」と仮称しておきたい。この系列は、加曾利E II式連弧紋系列に変化が迫ると推測されるもので（笹森 1976）2a紋様帶・2b紋様帶の分帯も継続している。加曾利E III式になって1紋様帶が消失するのではなく、加曾利E II式連弧紋系列ではすでに1紋様帶が消失している点注意が必要である。同一器形で縄紋だけ、条線紋だけを施紋する粗製土器が伴う。この系列は、南関東から中関東にかけて分布するようである。



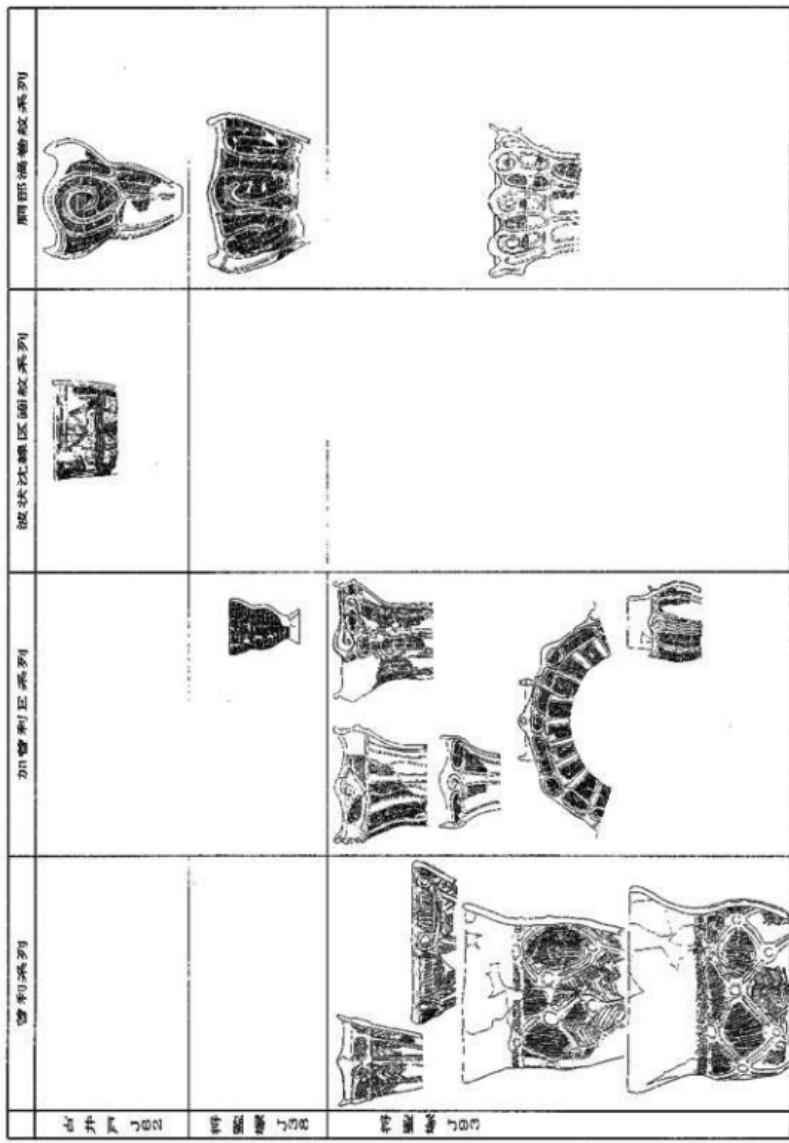
第10図 将軍塚J-57号住居跡を中心とした加曾利E III式基本系列



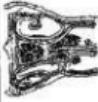
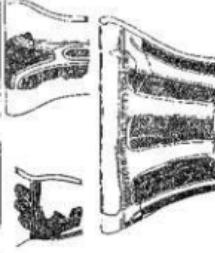
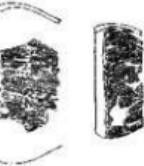
第11図 埼玉県における胴部渦巻紋系土器(1)



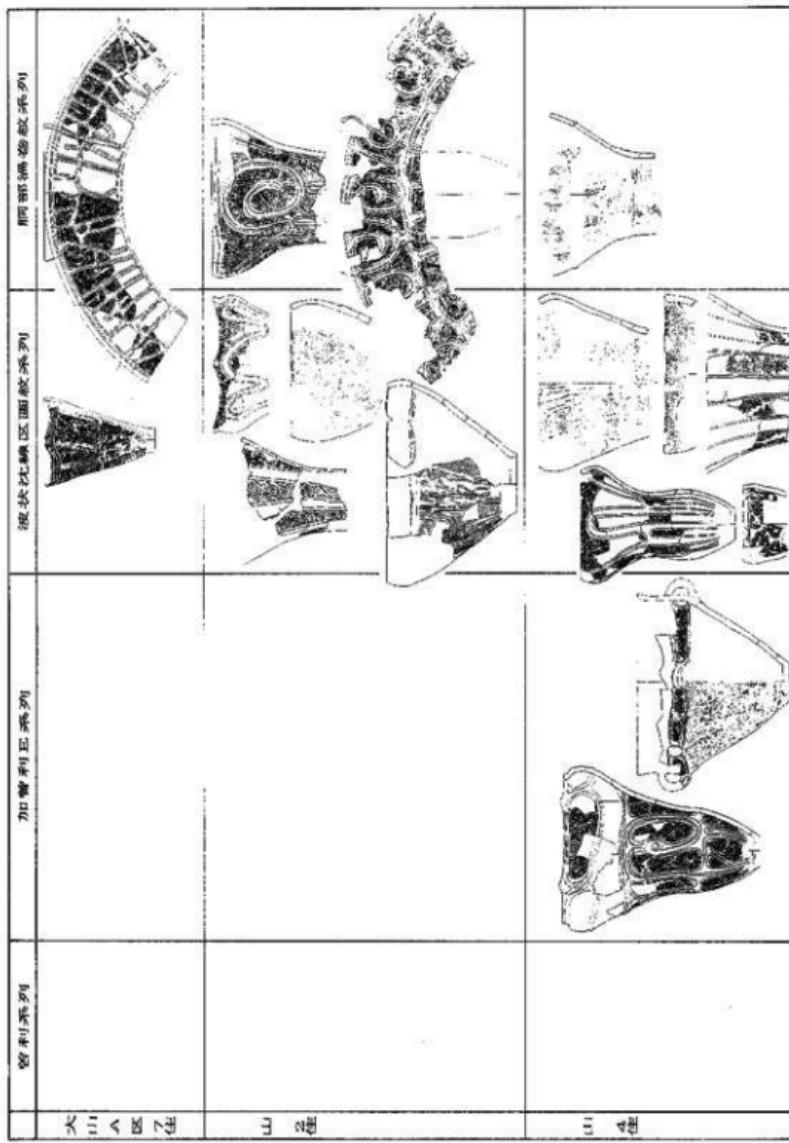
第12図 埼玉県における腹部渦巻紋系土器(2)



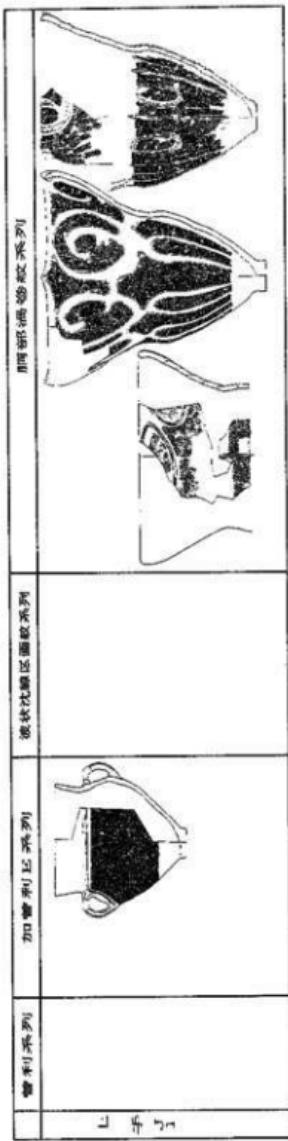
第13図 胸部渦巻紋系土器を中心とした遺構出土土器(1)

竹内一氏の作	加賀利五郎作	越後守義貞作	脚部渦巻紋系土器
			 
			
	 	 	

第14図 脚部渦巻紋系土器を中心とした遺構出土土器(2)



第15図 脇部渦巻紋系土器を中心とした遺構出土土器(3)(a)



(b)

向山遺跡第3類-胸部渦巻紋系列の土器。口縁部は内
折し、胸部で括れる深鉢形土器で、隆起線・沈線による
渦巻紋を2紋様帶に描き1紋様帶を喪失するものを基準
とする。この系列の生成については、明瞭でないため今
後の追求が必要である。波状沈線区画紋系列と同様に「2
a紋様帶」・「2 b紋様帶」におおよそ分けられる。本系
列は、東部関東に分布の中心を持つ。将監塚J-57号住
居跡からの出土がないため、古井戸遺跡例と風早遺跡例
を図示しておいた。

向山遺跡で未検出の系列一曾利系列の伝統下に成立す
る系列である。埼玉県の中央以南ではあまり検出されな
い。埼玉県北・群馬県方面に分布の中心を置き、ある意
味で胸部渦巻紋系列と対立(紋様が相似する分だけ)す
る。1紋様帶と2紋様帶に分帶し、条線・沈線・綾杉状
の沈線を充填する。地紋だけ異なっているが加曾利E系
列に似通って、タイプと外反・直立する器形を持ち、口
縁下を無紋とし、2紋様帶に隆起線による渦巻紋に相似
した紋様を配し(谷井の分析がある 谷井 1989)(註1)
集合沈線を充填するタイプの2者がある。

以上、向山遺跡出土土器の大まかな復元をおこなった。
向山遺跡は、少數の加曾利E系列・波状沈線区画紋系列・
胸部渦巻紋系列の3つの組成からなっている。言ひ替え
れば、4つの系列の増減が地域差を現すのである。

2、胸部渦巻紋系土器について

加曾利E III式土器の中で特に胸部渦巻紋系土器を注出
して、その特徴・他の系列との併出関係について簡単に
述べたい。(註2)

[器形について]

1. 平縁深鉢形土器と波状口縁深鉢形土器がある。
2. 口縁部は、急激に内凹することが多く、胸部中央付
近で括れて底部にいたる。久保山遺跡4号住居跡は、括
れ部が上位にあり加曾利E系列の影響を受けている。将
監塚遺跡グリッド例は、口縁部が直立して括れ部を持た
ないようである。

3. この系列の器形は、独自性をもっており他の系列と

は共通しない。

[紋様帶について]

1. 口縁部紋様帶を持たない。
2. 明瞭でないものもあるが、大略胴部括れ部を境として胴部紋様帶が二分される場合が多い。胴部上位の紋様に対して「2 a 紋様帶」、胴部下位の紋様に対して「2 b 紋様帶」と仮称しておく。

3. 口縁部紋様帶を持たない点では、波状沈線区画紋系列と共通する。

[紋様について]

1. 紋様は、大部分が隆起帯・微隆起帯で描かれる。しかしながら、北遺跡78号土壙のように同一の紋様帶・紋様を有しながら沈線で描かれるものも存在する。これは、波状沈線区画紋系列の影響である。

2. 隆起帯は、1本で描くもの、2本1組で描くものの2者がある。

3. 「2 a 紋様帶」について

- a. 溝巻紋を描く事を原則とするが、大山遺跡A区7号住居跡の様に溝巻を描かないものもある。また、隆起帯や沈線が意図紋様とならずに充填繩紋部分が意図紋様となり「J」字や「r」字、「O」字状を呈する場合もある。これは、退化形態であり、上手遺跡J-1号住居跡、原遺跡N^o1地点の1の土器（第30図1）（金子：19）等が該当する。

- b. 北宿4号住居跡は、特異な例である。2 a 紋様帶と2 b 紋様帶が逆転している。本来ならば、2 b 紋様帶にあるべき懸垂紋が2 a 紋様帶に配され、溝巻紋が2 b 紋様帶に描かれる。

4. 「2 b 紋様帶」について

- a. 隆起帯・微隆起帯・沈線による懸垂紋を原則とするが、転化した精円紋や「匁」字状の充填繩紋部分が意図紋様となる場合がある。

- b. 精円紋や「匁」字状の紋様は、波状沈線区画紋系列の2 b 紋様帶による影響である。

- c. 一方で、大山A区7号住居跡、風早遺跡、北遺跡25号住居跡、古井戸遺跡J-77号住居跡のように2 a 紋様帶と同一紋様を2 b 紋様帶に配するものがある。

[各遺跡の胴部溝巻紋系土器について]

1. 将塚遺跡（第11図1～4、25） いずれも、胴部上半部である。2 a 紋様帶に溝巻紋が配される。4は、前述したように内身しない器形を持つ。1、2、4が1本の隆帯で描かれ、3が2本1組の隆帯である。J-93号住居跡からは、大木9式の古い部分に属すると思われる波状口縁深鉢が出土している。

2. 古井戸遺跡（第11図5～7、26、27） 3個体の実測図が見える。5、7は、波状口縁深鉢の通常タイプ。6は、2 b 紋様帶にも溝巻紋が配される。J-49号住居跡からは、大木9式の新しい部分の深鉢が2個体出土している。

3. 山遺跡（第11図8、9） 2号住居跡からは、平縁深鉢形土器が2個体出土している。8は、2本沈線による過巻紋を2 a 紋様帶に配し、2 b 紋様帶との境が明瞭でない。9は、通常タイプ。

4. 提灯木山遺跡(第11図10~15) いずれも、微隆起帶で描かれる。4号住居跡からは、良好な一括資料が出土している。5号住居跡の波状口縁深鉢の2b紋様帶は、沈線間に条線が充填される懸垂紋である。13~15までは、2a紋様帶と2b紋様帶が比較的明瞭に分離している。

5. 上手遺跡(第12図16、17) いずれも、退化したもので胸部渦巻紋系では新しいものである。16の2b紋様帶は、充填格円紋で波状沈線区画紋系の影響である。

6. 各遺跡から単独出土しているもの(第12図18~24) 18は、花影10号住居跡で通常タイプ。19は、2a紋様帶と2b紋様帶の境が明瞭でない。20、21は、あまり卷かないタイプ。21、22は、2b紋様帶にも渦巻紋が描かれるタイプである。23は、2a紋様帶の紋様と2b紋様帶の紋様が逆転するタイプである。

[胸部渦巻紋系土器を中心とした伴出関係]

ここでは、住居跡から他の系列を伴出する胸部渦巻紋を抽出して検討したい(第13~15図)。良好な出土状況である提灯木山遺跡等は、良好な伴出関係がないので除外してある。

1. 古井戸J-62号住居跡、大山A区7号住居跡では、終末期の連弧紋系列が伴うようである。

2. 将監塚J-93号住居跡の大木9式には、加曾利E系列、曾利系列が伴う。ここでは、図示できなかったが加曾利E系列の相互比較によって胸部渦巻紋系列と曾利系列が伴う事は明らかであるが、古井戸J-62号住居跡、将監塚J-38号住居跡では、競合関係にあるのか曾利系の伴出はない。

3. 将監塚・古井戸両遺跡では、波状沈線区画紋系列とは伴出しない。

4. 大宮台地・埼玉中央部では、曾利系列の伴出は明らかでなく、加曾利E系列深鉢の伴出も多くはないようである。

5. 大宮台地・埼玉中央部では、波状沈線区画紋系列と盛んに伴出する。これは、紋様帶構成が共通する事からかきわめて興味深い。

6. 伴出する加曾利E系列の深鉢以外の器種で興味深い点が2点ある。第1点は、両耳壺が伴う例が意外と多い。花影10号住居跡、北遺跡78号土壙、山遺跡4号住居跡、上手遺跡J-1号住居跡で出土している。第2点は、小形台付深鉢が伴う例である。将監塚J-38号住居跡、北遺跡25号住居跡で伴出している。これは、大木式に通じる器種である。

[小結]

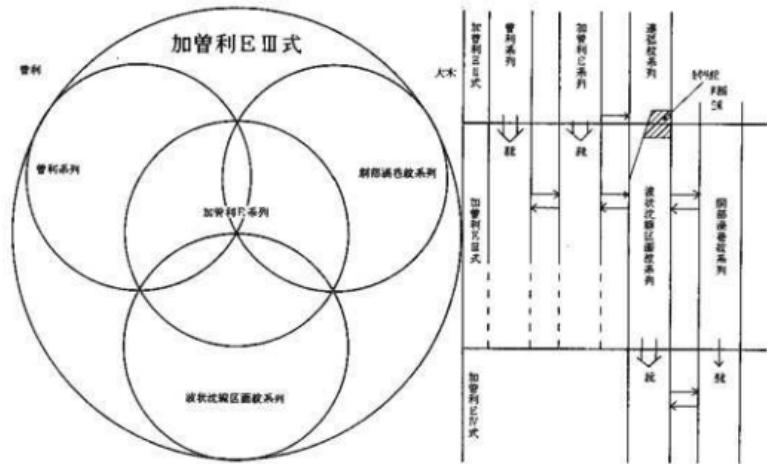
加曾利E III式を概観する中で、胸部渦巻紋系列の土器に触れたが、とりとめのないものになってしまったかもしれない。今後、生成過程の追求とともに加曾利E III式の中で4つの系列が相互にどのような関係を保持していたかが課題となろう。

注1. 水窪の土器は、折衷の様相のため論文を参照していただきたい。

注2. 沈線紋を持つ胸部渦巻紋系土器については、漏れがあるかも知れない。

参考文献

笠森健一 1977 「VII結語 ー1.前島・島之上・出口・芝山遺跡出土の土器ー」 上越新幹線埋蔵



第16図 加曾利E III式理解の概念

文化財報告 I 埼玉県遺跡調査報告書 第12集

青木美代子 1982 「縄文中期土器群の再編—第7節 13期一」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要1982

谷井 彪 1986 「加曾利E式土器にみられる大木式土器の要素」 埼玉県立歴史資料館 研究紀要 第8号

右坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信 1987 「加曾利E式土器に関する一考察—いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜—」 群馬県の考古学一群馬県埋蔵文化財調査事業団創立十周年記念論文集一

谷井 彪 1989 「岡部町水窪遺跡出土大柄渦巻文土器について」 埼玉県さきたま資料館 研究調査報告 第2号

谷井 彪 1974 「花影遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集

福永久美子 1979 「風早遺跡」 庄和町風早遺跡調査会

谷井 彪 1979 「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集

金子直行 1982 「衆生ヶ谷戸」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第12集

中村誠二 1983 「北宿遺跡—第5区—」 浦和市遺跡調査会報告書 第24集

大塚孝司 1983 「久保山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第29集

石塚和則 1986 「将監塚—縄文時代—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第63集

金子直行 1987 「北・八幡谷・相谷」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第66集

植木 弘・植木智子 1988 「行可免遺跡」 埼玉県比企郡嵐山町遺跡調査会

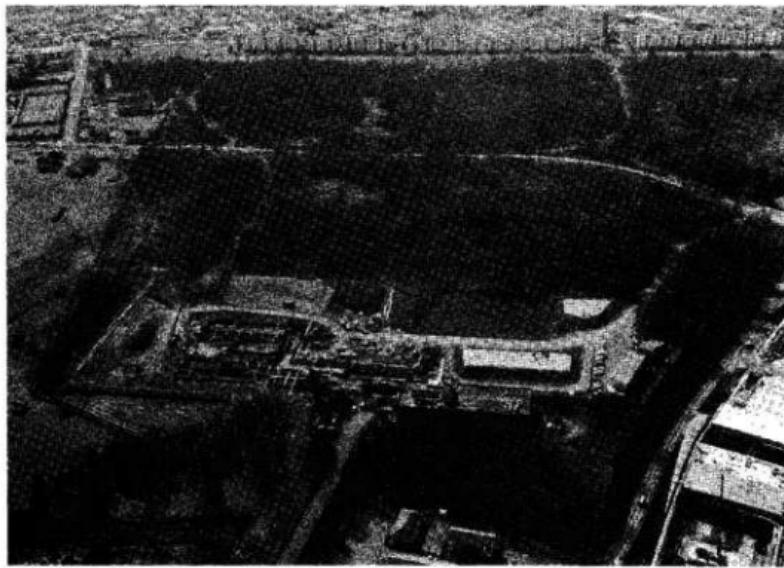
宮井英一 1989 「古井戸—縄文時代—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第75集

柿沼幹夫・笹森健一 1989 「上手遺跡発掘調査報告書」 北本市上手遺跡調査会

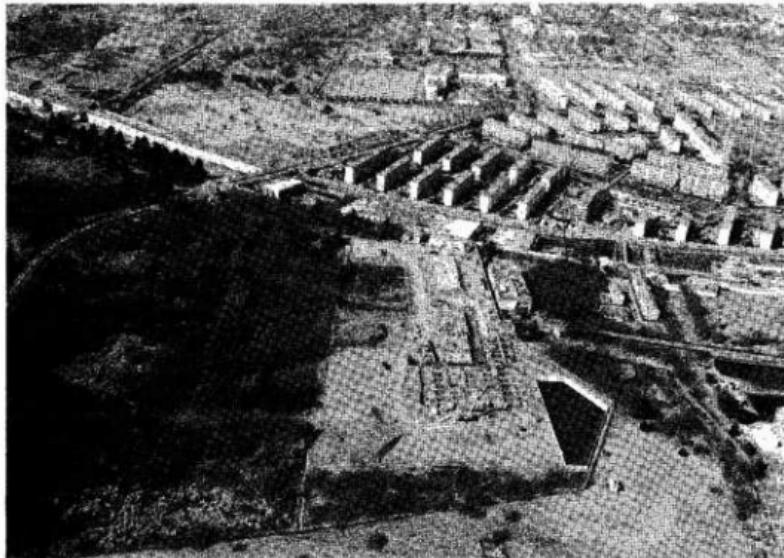
濱野美代子 1990 「提灯木山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第92集

奥野麦生 1990 「山遺跡」 白岡町遺跡調査会報告書 第1集

写 真 図 版

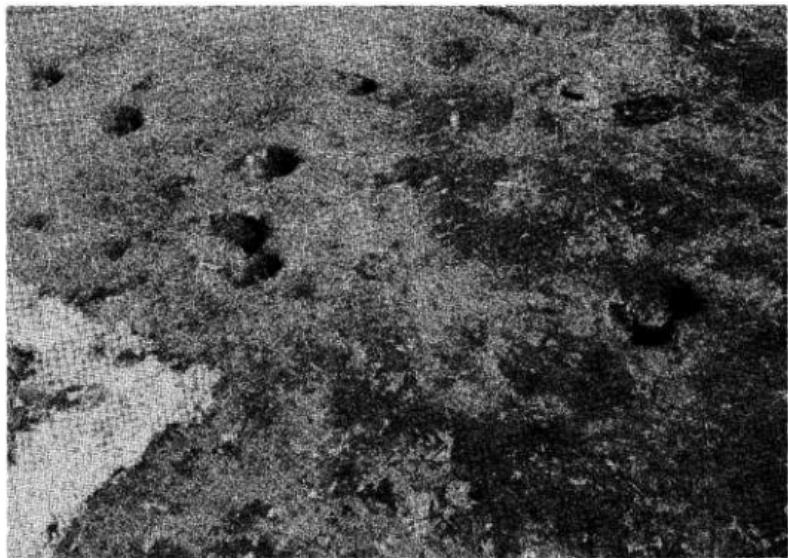


遺跡全景(1)

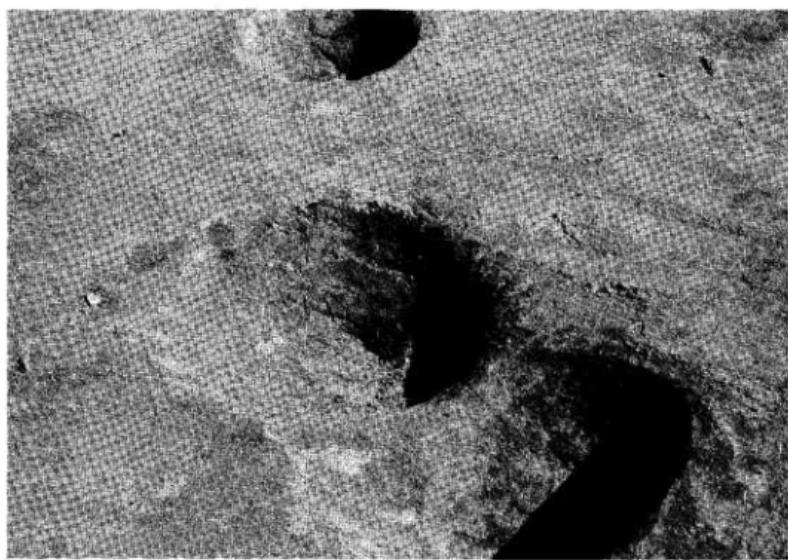


遺跡全景(2)

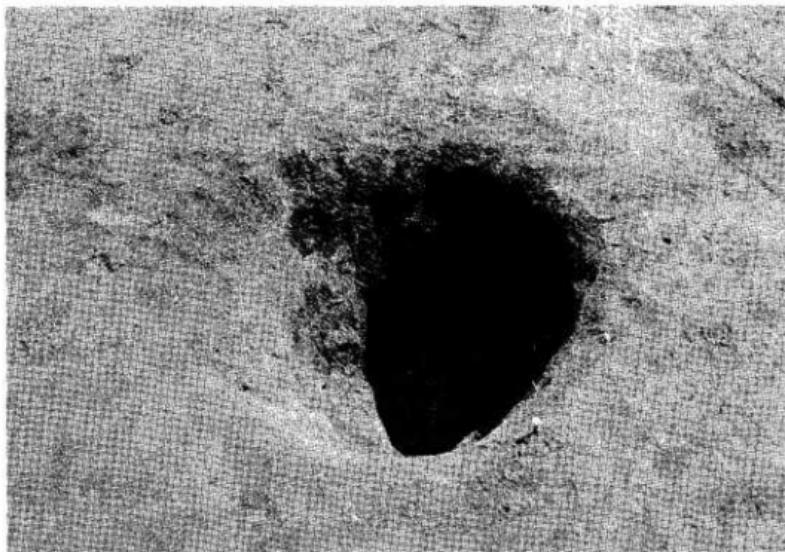
図版 2



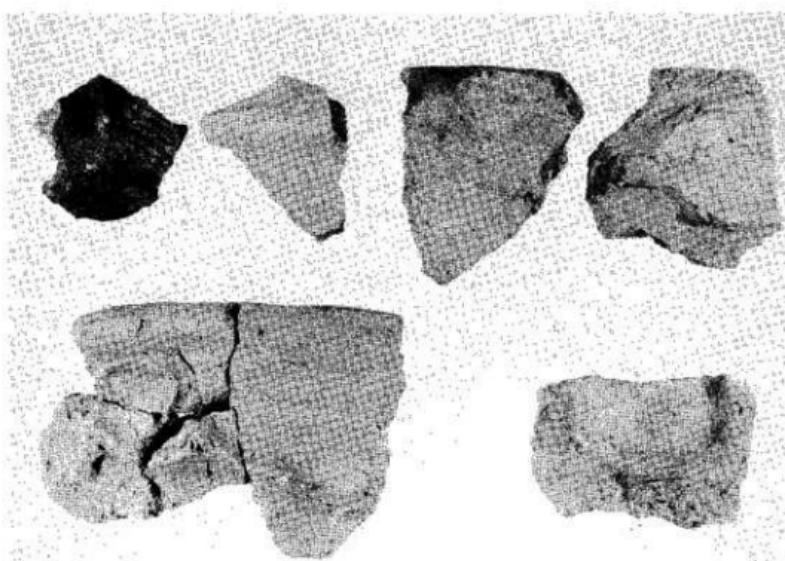
ピット群



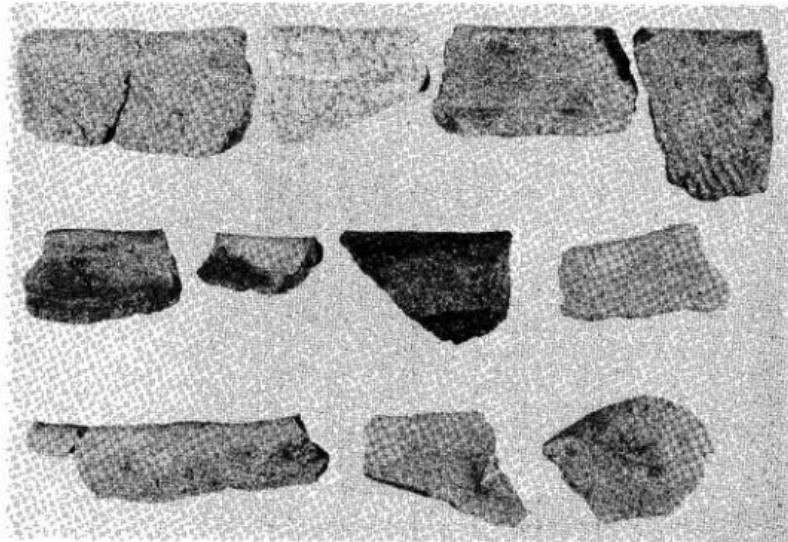
ピット(4・5・6)



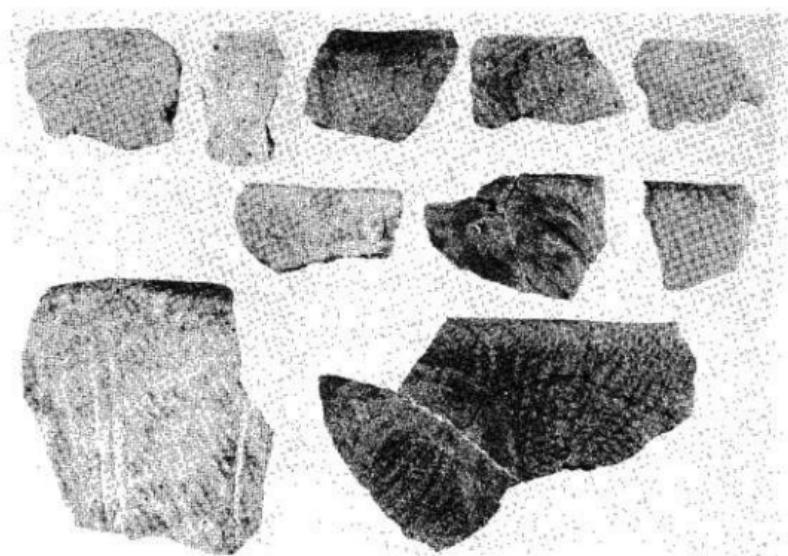
ピット(12)



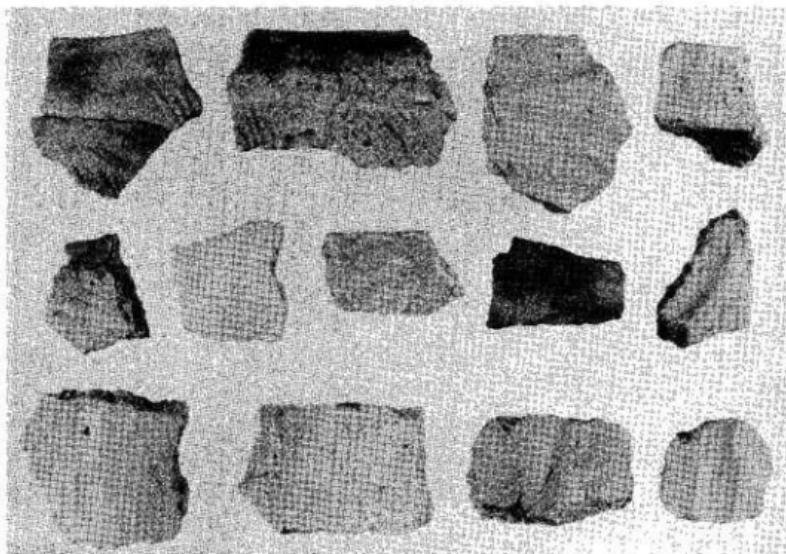
グリッド出土土器(1)



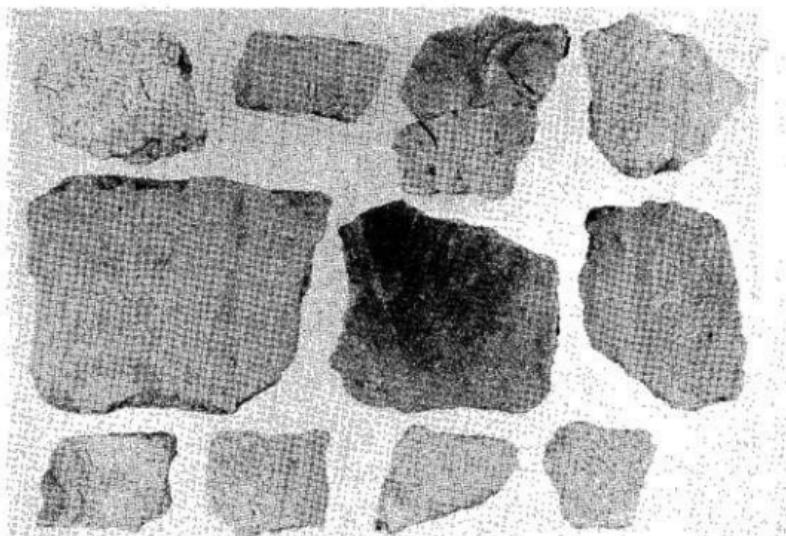
グリッド出土土器(2)



グリッド出土土器(3)

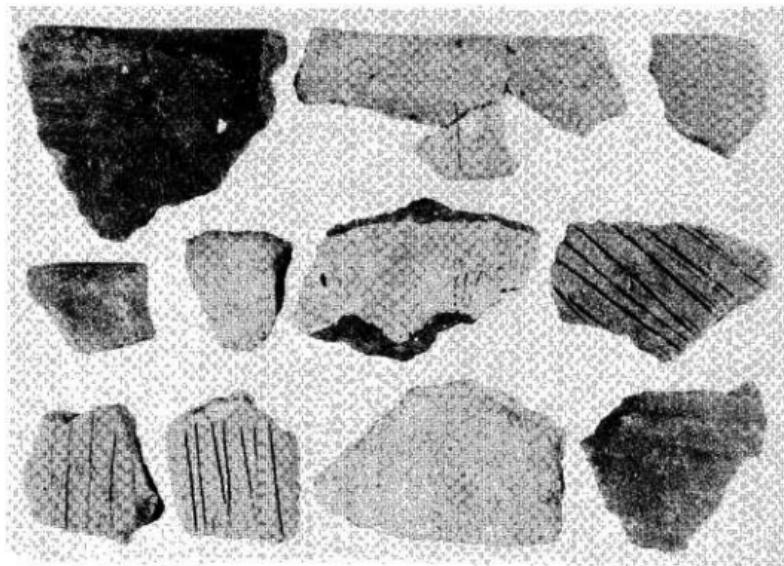


グリッド出土土器(4)

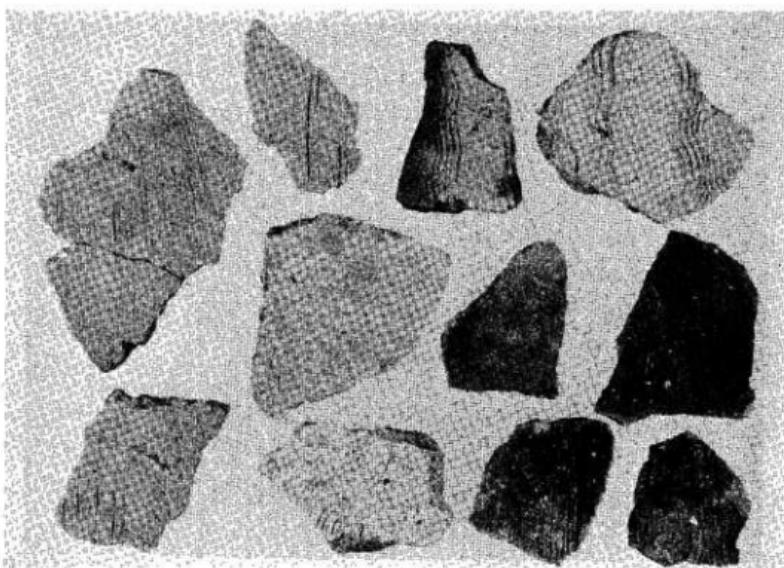


グリッド出土土器(5)

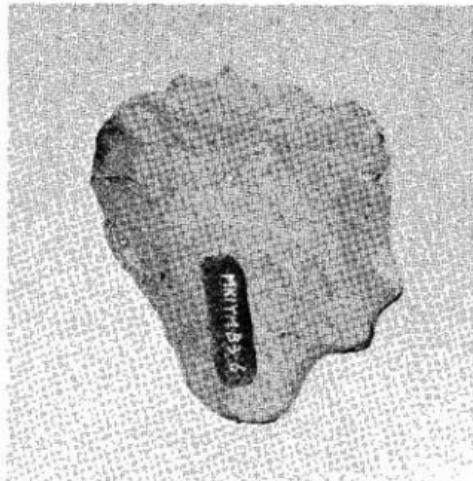
図版 6



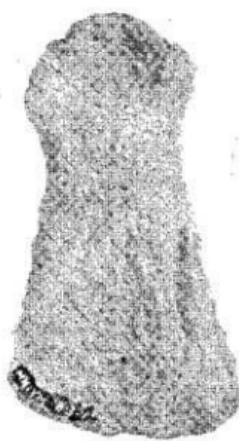
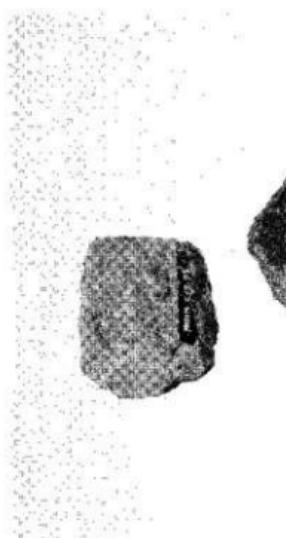
グリッド出土土器(6)



グリッド出土土器(7)



グリッド出土土器(1)



グリッド出土土器(2)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第106集

向山遺跡

理化学研究所関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年6月25日 印刷
平成3年6月30日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884
電話 (0493) 39-3955
FAX (0493) 39-3579

印刷 凸版印刷株式会社
〒110 東京都台東区東1-5-1